

## Y-PAC journal vol.1 都市の始まり

Text by yoichi koizumi

写真家・畠山直哉氏の「Lime works」という写真集を買った。Lime というのは石灰石のことで、これは畠山氏が10年以上にわたって撮り続けた日本中の石灰採掘場とセメント工場を記録した写真集である。はじめ僕の興味はその工場群の姿そのものにあった。今はやりの「工場萌え」的な視点だったかもしれない。表紙を開くと幻想的な色調の石灰の粉の山の写真から始まり、巨大なパイプが複雑にのたうちまわるセメント工場の写真が続く。人工的な構造物として、僕らが普段見慣れた建築よりもはるかに複雑で、無秩序で、しかし限りなく合理的な風景がそこに写っている。僕のショボイ想像力を軽々と超える現実の設計に対する憧れに似た感情が湧いてくる。鉄骨やパイプに浮かぶ赤錆や、屋根に降り積もった白い石灰さえ美しい。

本の真ん中で畠山氏の文章をはさみ、後半は石灰採掘で削られている鉱山（あるいは島）の風景が、場所の説明もなく淡々と写し取られている。山丸ごと階段状に採掘されているようすは、南米マヤ文明などのピラミッドのようにも見える。また、見る人によっては自然豊かな島々がごっそりハゲ山になっているのを見て、「なんという自然破壊だ」と憤りを覚えるかもしれない。しかし確かに自然破壊だとは思いますが、僕が受ける印象は少し違う。氏の文章からも感じられることだが、その風景とそこで働く人々に対する愛情のようなものが伝わってくるからだ。大写真家の作品に偉そうなことを言っているようで気が引けるが、どの写真もとても丁寧に撮られているように思える。長時間露光によって、トラックのテールランプも光の帯となって景色に溶け込む。石灰石というものは、資源の少ない日本において国内だけで自給できる数少ない鉱産物なのだそうだ。日本各地の山からガリガリ削りだされた石灰は、さらにすりつぶされて粉になり、工事現場に運ばれてコンクリートの都市をつくる。僕は以前東京タワーから東京の街を眺めて、よくこれだけの鉄とガラスとコンクリートを運んできて360度人工物の都市を造ったな！と感動したことがある。その始まりはこの本の中であって、何かが増えれば何かが減る、というあたりまえのことを思い出させる。畠山氏の石灰産業に対する愛情は、もしかしたら都市に対するそれと同義なのかもしれない。

この本が伝えたいことを僕は正確に受け止められていないのかもしれないし、感じたことを正確に表現できているとも思わない。そもそも写真を見てそんなことを理解しようとする必要すらないことなのかもしれない。写真雑誌などで、退屈な投稿写真や、ゆるいお散歩写真なんかを見て、写真でこんなものなのかと幻滅することがよくあるが、この本のような作品集を見て、自分はこういうものが撮りたいのかなと思った。人間の目が「無意識の目」だとするとカメラは「意識の目」だと思う。自分は何が好きなのか、何を求めているのか。大げさかもしれないが、写真を撮ることはそれを自問することでもあると思う。今のところ、僕は「都市」とそこに暮らす人々に興味があるようだ。そして自分が社会とどう関わっていけるのか、世の中が何を必要としているのか。写真を撮ることや、こんな支離滅裂な文章を書いて衆目にさらすことで、少しでも前に進めたらと、もがいてみたいのです。

May 5 2008